



**SPIRITUAL
P**ORTRAIT **38**
取材・文＝甘利てる代 写真＝山本真也

キラリと
輝くその秘密

山本

やまもと まさき

雅基さん

「きぼうのいえ」で最期の時を過ごす人々
山谷のホスピスは命に向き合う試みだ

昔、その橋の向こうは刑場だった。処刑される罪人達はこの世の別れを涙ながらに惜しんだことから橋は「^{なみだ}涙橋」と名づけられた。橋はすでに「涙橋交差点」としての地名だけが残る。その涙橋交差点（東京都台東区）に立つと、早速目に飛び込んできたのはシルバーカーに山のように荷物をくくりつけた高齢の男性だった。見れば足元はゴムサンダル。しかもサンダルは、かかとが半分以上も出る小ささだ。歩きにくそうだなと思う間もなく、交差点を渡ってきた高齢男性。冬空にアンダーシャツにチョッキを重ねた上半身にスエットズボン、素足にサンダル履きといういでたち。通りに並ぶ簡易宿泊施設の一つで、さっき起きたばかりという風情だ。ここは日雇い労働者が多く集まる山谷、あるいはドヤと呼ばれる地。現在は山谷という地名はなく、高度成長期を支えたかつての働き盛りもすっかり高齢化してしまった。それでも、連綿と続く人々の暮らしがあることに変わりはない。

「きぼうのいえ」は山谷にあるホスピスだ。身よりのない、行き場のない、しかもさまざまな難病を抱えている人達を受け入れている。がんの末期を迎えていたり、HIV、心臓病や肝臓疾患、脳梗塞など病名を挙げたらきりが無いほどだ。開設したのは2002年の秋。開設者は山本雅基さんと妻の美恵さん。

涙橋交差点から四つ角を2つ3つ曲がると「きぼうのいえ」が見えた。薄茶色の鉄筋4階建ての建物だ。中に入ると思ったよりも狭いことに気

がついた。廊下は反対側から歩いてきた人とすれちがう際には体を斜めにしなければならないほど。だが、その意味はすぐにわかった。

「32室全部が個室です。ええ、このビデオ付きテレビ、冷蔵庫、エアコン、介護用ベッド、クローゼットと洗面台も備え付けです。広さは約4.7畳。山谷は天涯孤独の人が圧倒的に多いから、できるだけ数多くの居室をつくりたかったんです」

山本さんは、居室は終のすみかだと考える。空間に思いを込めたかったのだ。

「死んでいく場を提供するのではなく生ききる場として使ってほしいから、生活をする上で必要だと思うものは入れたつもりです。紙袋一つでここにやってきてもその日から自由に暮らしていければ意味がありません。そして何よりも重要なのは、ホスピタリティーの場だということです」

山本雅基さんは屋上に設けられた小さな礼拝堂の中で、正座の足を少し崩すと、まっすぐ正面を見据えて話し始めた。山本さんの背後にはここで看取った人たちの写真が並ぶ。

「僕はスタッフに6つの大切なことばがあると言っています。一つ目はUnderstand（理解します）、それからSympathy（共感します）、Hospitality（もてなします）、Service（奉仕します）、Smile（笑顔で接します）、Love（愛します）

美恵さんは看護師だ。雅基さんと知り合ったのは上智大学の社会人講座「ホスピス・ボランティア」である。めぐり合うべくして出合った2人の新婚旅行は山谷だった。「ここしかないよね」と2人の意見は見事に一致した。





【写真上】 屋上にある礼拝堂にはここで看取った利用者の遺影が並ぶ。2008年11月には、美恵さんの出身地である長野県伊那市に、身寄りがなく引き取り手もない遺骨を納めるお墓をつくった。

【写真下】 3年間、週に4日、なんと片道1時間半をかけてボランティアに通っているのは若林節子さん。夫を10年間介護し、看取った経験がある。「ここに来るのがうれしいの」。

松澤さんの居室にお邪魔した。テレビを観ていたという。松澤さんは手術で声帯を失くしているが、山本さんとはことばがなくとも通じ合っている。この後、松澤さんは着替えて外出。いつも通ってきてくれるヘルパーさんの事業所まで歩いて出かけた。きっと会いたかったのだ。



としています。『きぼうのいえ』では処遇や業務ということばは使いません。ここは人生の終焉に向けての芝居の舞台なんです。主人公は入居者一人ひとり。主人公は生活の中で演じながら、自分と和解し、そのことが結果的にQOLを高めるのです」

宗教者でもある山本さんははっきりと「僕は輪廻転生を信じています」といい、「辛酸をなめた999日であっても、最期の1日が豊かで満たされていれば、次の世界に飛翔していく喜びが生まれると思う。人は次に生まれ変わる人生に失望しないためにも、幸せに死ぬ権利がある」とも。

「きぼうのいえ」は集合住宅である。行き場がなく困窮している人を、病院のソーシャルワーカーや福祉事務所からの紹介で受け入れる。入居者はきぼうのいえのある地に住民登録をして、生活保護の受給を得る。多くの入居者はきぼうのいえのスタッフの生活支援を受けながら、また通院を続けながら日々を過ごすことになる。時には介護保険で地域のデイサービスに通う

人もいる。やがて病状が悪化して自力で動けなくなると、きぼうのいえに週に一度往診に訪れる医師の診察や、在宅ホスピスを専門にしている医師の訪問診療を受けることになる。02年に開設した「きぼうのいえ」ではこれまでに86人を看取った。死が身近にあるのだ。だが「きぼうのいえ」にたどりつくまでに持つべきもののす

べてを失った入居者は、その締めくくりに死があることを「不思議と恐れない」（山本さん）という。生活の中に死があり、命について感じたり考えたりすることができる場だからだろうか。いや、そんな単純な回答ではないはずだ。もう少し探してみよう。

ここでは入居者は自由だ。喫煙やお酒も本人の健康に多大な影響を与えない限り規制はしない。そうはいっても、みな難病を抱えているから、山谷の町を東奔西走とはいかない。通りの向かい側にあるパチンコ屋「あたりや」で気晴らしをしたり、ヘルパーと一緒に散歩に行くくらいだ。末期がんで点滴をしていた男性は、点滴スタンドをカラカラと転がして「あたりや」に通っていたというから、見事なまでの制約のない暮らしぶりだ。

「あのね、Eさんはスタッフと一緒にパチンコでお金を稼いで、それを旅費にして出かけたんだよ。ふるさとの能登までスタッフと2人で一泊旅行をしたんだ」。話しながら山本さんはうれしそうだ。スタッフ（看護師）の回顧録によればこうだ。

Eさんは末期の喉頭がんだった。余命は1ヵ月といわれており、本人もそのことを知っていたが、診療所に行くと見せかけて上野まで遊びに行ってしまうほどの行動派だった。Eさんには3つの穴が開いていたとスタッフは書いている。一つはがんが再発して開いたあごの穴、もう一つは首にあけた気管孔（呼吸をする穴）、3つ目は胃ろうだ。健康な人は、体に穴が3つ

開いている人間が幸福であるはずはないと思うだろう。しかも死が迫っている。だが、写真に残されたEさんの笑顔には不幸を感じさせる一片の曇りもないのだ。透き通っているとでもいおうか。

Eさんはある日、スタッフに「田舎に行きたい」と言い、スタッフはそのリクエストに応えたのだった。あぶく銭とはいえ軍資金があったのは奇跡としか言いようがない。無事里帰りから戻ったEさんは、その1ヵ月半後に亡くなった。スタッフの腕の中で。穏やかに眠っているようだった、とスタッフ。

「きぼうのいえ」のスタッフに共通しているものがある。向かい合った相手を理解しようとする柔軟さだ。受け入れるだとか、寄り添うということばでは当てはまらない、もっと間口の広い、奥行きのある柔らかさともいおうか。それは相手の人生を「愛おしい」と思う気持ちと一対である。すべてを失い人間を信用できなくなった人間は、やはり人間に向かいあうことでしか再生はできないのだ。山本さんは「その人の過去に色をつけないで見る。つまり透明な目でみるということかな」と、きぼうのいえのケアについて説明。前述の問いの回答が見えてきた。

さて、「きぼうのいえ」の事務室では、美恵さんが長い時間をかけて薬局から届いた入居者一人ひとりの薬を点検しセットしていた。薬の種類と量の多さからも、入居者の病状が平調でないことがわかる。「容態もしょっちゅう変わるので薬

の変更も多いですね。みなさん一見元気そうに見えますけれど、体は正直だと思います」と美恵さん。

今日は週に一度のティーサービスの日だ。午後2時になるとボランティア数名が4階の談話室に、ワゴンでお茶のセットを運んでいく。午後の日差しが差し込む部屋には、この日を楽しみにしている女性入居者が首を長くしてワゴンの到着を待っていた。別のボランティアに手を引かれた他の女性入居者もやってきた。「一週間、元気にしていた?」「いたわよ」「最近私、朝になったら、今日も生きていてよかったと思うのよ」と会話が続く。

山本さんはカトリックの神父になろうと大学の神学部在籍していた時に山谷を訪れ、ホームレスのためにホスピスを作りたいと思った。実現には十数年がかかった。そこに至るまでの間に、軽度ではあるがアルコール依存症になり、うつ病を発症した。長く苦しい時を超えてきた分、人間としての弱さをちゃんと持っている。だから誰もがこの人には本心を語りたくなるのだろう。

「6年も山谷に住んでいるから、もう僕のふるさととここなんです」。山谷の町全体をホスピスにするという、自称「21世紀のダウントウン構想」を語る山本さん。それを聞く恵美さんの笑顔は菩提か。やはりこの2人、求道者だ。

ニュースレターと山本さんの著書「山谷でホスピス始めました」(実業の日本社)。副題には「「きぼうのいえ」の無謀な試み」とあるが、読めば読むほどにそのとおりだと思ってしまう。でも読後のすがすがしさに、生きる勇気もらったようだった。



やまもと まさき

特定非営利活動法人山谷・すみだリバーサイド支援機構理事長。1963年東京生まれ。1985年の日航機墜落事故をきっかけに聖職者を志す。95年に上智大学神学部を卒業。NPO法人の事務局長などを経て、ホスピス開設に至る。看護師である妻の貯金を元手に各地のキリスト教会やボランティアの後援を得て、2002年4月に緊急一時保護施設「なかよしハウス」、同年10月にホスピスケア対応型集合住宅「きぼうのいえ」を開設、現在に至る。

